

村落研究の歴史地理的アプローチ

野 崎 清 孝 *

The historico-geographical approach to village studies

Kiyotaka NOZAKI

はじめに

日本地理学史上、集落地理学のうちの村落を対象とする研究—村落地理学—の占める役割は大きい。昭和初年の小川琢治と牧野信之助による奈良盆地における環濠集落と砺波平野における散村の起源をめぐる論争以来、多くの村落研究が進められてきた¹⁾。綿貫勇彦は、村落研究を自然科学的方法と社会科学または歴史学的方法とのかかわりの中にもとめたが、基本的には景観論、集落形態論を重視する立場をとった²⁾。これは彼がルドルフ・マルチニーや、ハーパート・シュレンガーなどのドイツ学派の影響を受けたためであった。

村落研究は歴史学や社会学、経済学、民俗学の方面からも進められたことはいうまでもない。中村吉治は、村落はもちろん歴史的存在であるから村落構造を知るため歴史的分析を行うのは当然であるし、現在の実態の調査を通じてそこに見られる歴史を知り、また書かれた史料や慣習、または記憶されている過去の史料をそれにあわせ考察することによって本質に近づかねばならないと述べた³⁾。鈴木栄太郎は、農村社会学の体系的理論を展開したが、とくに集団を結束させている要素の分析の必要性を強調した⁴⁾。柳田国男の民俗学は、民俗事象を研究の対象としたが、村落そのものを研究対象とするものではなかった。その後、柳田勝徳は、従来の民俗学のあり方を反省し、民俗学独自の立場から村落の把握が必要であることを主張した⁵⁾。さらに小野武夫は、村落研究の一面は政治史であり、社会史であり、経済史であるとともに、他の一面は地理学であり、民俗学であると考えたが、この構想は総合的村落研究の出発点であった⁶⁾。

こうした研究の蓄積が進む中から村落の歴史地理研究は次第に社会地理学との接近によって村落の社会構造や地域における村落間の結びつきなどを解明する方向に研究の中心が移ってきた。最小の地域統一体を基礎地域とし、古い基礎地域の連合、あるいはそれをもとにした基礎地域の膨張がすでに中世にもみられたとする見解を述べたのは水津一朗であった⁷⁾。

本稿は、このような村落研究の進みの中で村落をどのように歴史地理的に把握し、分析すべきかの問題点をとりあげることにした。ここではとりあえず a 中世的秩序からの継承、b 村落の成立と変遷、c 村落の内部構造、d 村落結合と地域的紐帯に限定して述べる。

a 中世的秩序の継承

今日の村落にひきつがれる制度的（行政的）村落の起源は、基本的には文禄検地とか太閤検地と呼ばれる検地にある。検地は田畑から年貢をとるためのものであったが、この中で村の田畑・屋敷面積、したがって当然のことながら村の領域、境界線を確定し、これを単位として検地帳・名寄帳や村絵図が作成された。村の領域決定は、一律機械的におこなわれたものではなく、検地以前の地域秩序を生かしてのことである。村落の時代的連続性から考えて、古代はともかくとして近世に先行する中世期—庄園時代—の村落を前提にしなければ、村落を論ずることはできない。中世村落をとりあげた清水三男は、彼自身はそうした研究をおこなわなかったが、中世の研究が堅実におこなわれない限り、われわれの現代村落に対する知識の基礎もまた不確実不十分を免れないとし、われわれ文献学派は地理学者の歴史地理学的研究の方法をとりいれねばならないと述べている⁹⁾。

中世村落の復原は、庄園坪付帳や庄園絵図などの史料を通して、これを地形図におとし、近世村落さらに今日の村落とその広がりや構造を比較するといった方法が試みられている。しかし中には越中国砺波郡伊加流伎庄や同じく井山庄のように復原が困難なものもある。これら庄園のあったところは、庄川扇状地上にあり、たびたびの河道変遷によって地表面の変化が著しいからである。越前国足羽郡糞置庄は、昭和45年(1970)以来の発掘などによって復原が進められてきたが、最近の圃場整備による地割の変化が惜まれる。

12世紀から13世紀にかけての条里地域の集落復原では疎塊村形態の大和国添上郡池田庄や集村形態の同じく山辺郡乙木庄はともに今日の形態とあまり変わらず連続性が認められる。いっぽう同じく条里地域の太和国添上郡若槻庄や摂津国豊島郡垂水庄は、いずれも12世紀には、小村・散村形態であったが、14世紀から15世紀にかけて集村化現象が進行した。これらの地域と異なって河谷を占める備後国世羅郡太田庄や薩摩国薩摩郡入来院では、今日にいたるまで小村・散村形態が連続している。こうした中から金田章裕が従来の研究では景観が固定的に把握されることが多く、しばしば村落の起源と村落形態の起源が混同されてきた問題点や村落の広がりや内部の充填の状態が検討されないままに漠然と集村を想定してきた問題点を指摘していることは注目される。たとえ連続していても村落そのものの時代的変遷の中で時代ごとに景観をとらえてゆくことが必要である。

大和国十市郡膳夫庄は、16世紀初頭には本集落、膳夫のほか、その西北に出合、東北に出垣内の分村集落を伴っていた。出合・出垣内は近世に入ると制度的にともに独立した村落として分離するが、中世庄園絵図によってその萌芽を認めることができる。膳夫・出合・出垣内の3村の領域は錯雑し、今日にいたっている。文禄以後の検地帳に「何々村枝(支)郷」とか「何々郷ノ内、何々村」などとあるのは中世にさかのぼっての検討が必要になってくる。

b 村落の成立と変遷

今日にひきつがれる村落の成立が文禄検地にあることは前述のとおりであるが、村ごとに検地帳が作成されたところからこれを単位として受検単位村の用語がある。またこれを単位に領主支配が行われたところから藩政村の言い方もある。検地帳、名寄帳、明細帳などの分析さらに相給(分給)の実態分析は歴史地理的アプローチの重要な分野である。

近世初頭の村数は明らかでないがおよそ42000村¹⁰⁾と推定され、その後『天保郷帳』による63562村へと近世を通じて増加している。増加分は村切によるものほか、分村・新村とくに新田開発によるものである。村切は近世初頭、多くは元禄年間(1688~1704)までに進行する。村切の究極のねらいは、中世的秩序としての郷、庄を村に分化することによって所領の錯雑、ひいては散り懸り=出入作を整理して年貢の村請を容易にするためのものであった。

近世における1村当たりの戸数を国別にみると、地域的にかなりの差がある。水津一朗が現在までの一般農村の基礎地域には、300人前後に人口適正規模があり、600~700人に人口増加をおさえる強い限界力がひそんでいると述べているが、人口適正規模300人は、戸数にしてみれば60~80戸である¹¹⁾。村切の進んだ畿内では大和国62戸、山城国86戸、摂津国90戸、河内国98戸というように平均的な適正規模である。これに対して安芸国248戸、讃岐国281戸、薩摩国319戸と規模が大きく畿内と対照的である¹²⁾。さらに周防・長門の両国では戸数200~300戸の大村と20~30戸の小村と2段階の村があり、村のオーダーのとり方に注意する必要がある。

村落と集落の関係からみる構成では、一般に一村一集落の標準型、一村に複数の同格の集落を含む須恵村型、疎塊村や小村の地域で複数の小集落を含む煙山村型があるが、こうした区分だけでは類型化は困難である。紀伊国では小名および枝郷という言い方があり、従属小名を有しない村、従属小名を有する村、小名のみの連合をなす村の中で内わけ免をなす従属小名を枝郷と呼び、枝郷が独立することもあった。前者を小名格枝郷、後者を村格枝郷と呼んだ。小名の中には2村以上からの出身者からなる出合小名(入会小名)もあった¹³⁾。奥三河には複数の村の出郷が集合することによって形成されたいわば村でない村一入り混じり村一が分布し、景観上は一村落のようにみえる¹⁴⁾。以上のように村落規模の大小や村落と集落の関係の地域性は複雑であり、さらに今後の歴史地理学からの調査、研究が待たれる。

新田開発は、近世初期から享保年間(1716~36)と寛政年間(1789~1801)から近世末期までに多いことが指摘されている。特にここで問題になるのは村請新田である。「新田村名之儀に付書付」(享保15年<1730>、幕府法令)による村名の規制、親村・子村の関係については注意する必要がある。明治初年の合村は、明治5年(1872)の太政官布告(119号)以後、明治22年(1889)の町村制施行まで続くが、中には村切以前の村、あるいは中世の郷、庄の復活としてとらえられる事例がある。

c 村落の内部構造

村そのものがムラであることもあるが、村の中にいくつものさらにムラを含むことがある。ここでムラというのは村の下位集団のことである。竹内利美によれば、村の下位集団である組とは村落の内部をいくつかに分画した一定地域に定位される家々が、その居住関係にしたがって、一律的に同じ集団に組織され、特殊な生活関連をもつものである。組はさらにその下に小組をもつことがある。これらはともに自生的な起源をもち、本質的には制度(行政)に根ざした五人組や隣保班などとは異なるものである。これら村の下位集団を小地域集団と呼ぶが、その意味するところは一定していない。大和国を中心とする畿内のカイト、伊賀国のコバ、肥前国のコガ、薩摩国のカド、三河国を中心とするセコ、下野国のツボなどと呼ばれる単位がそれである。同じ小地域集団でも讃岐国のメンバ(免場)や壹岐国のフレ(舩)、防長のクロ(畔)などは制度上の単位である。北陸、信越、関東、東北などにみられるマキ、マケ、イッケ、マツイ、ワカサレ、ジルイ、アイジ、ヤや沖縄のハルジ、ハロジなどは族縁集団で、本家・分家の同族結合をもとに祠を共有し、葬式組の単位であったりする。族縁集団と地縁集団は一つのムラの中で相互に共存している。なかには族縁集団から地縁集団への移行もみられ、小地域集団の構造は複雑である。

大和・山城・伊賀にまたがる大和高原には奈良県山辺郡山添村を中心に与力制度の族縁集団が地縁集団のコバと重なり合っている。与力制度は、中世後期の「寄騎」に起源があり、武士社会の一族の関係が近世の村落共同体の中にもちこまれたと考えられている¹⁵⁾。例えば山添村菅生は、現在71戸の山村である。大垣内・後出・峯出・谷出・鍛冶屋の5コバに分かれ、大垣内・峯出は十二社神社の表座、鍛冶屋・後出・谷出は同じく裏座の宮座を構成している。コバ

ごとの結束は強く、コバ山を持ち、ハカもコバ単位である。与力制度の17の組はコバの中に含まれ、家を中心としてすべて一与力、二与力の関係によって結ばれている。組の起源については明らかにできない。きわめて特殊な与力制度の主な機能は a 葬儀には与力が葬儀委員長になるとともに全体をとりしきる b 縁談については報告し相談する c 与力関係にある家が農作業におくれた時は相互に助け合う d 税金や節季割が納められない時には与力がたてかえる e さいめんせせり（所有地の境界争い）、財産整理、その他問題が起こった時には与力に相談するとともに決めてもらう f 家に不時災難があった時には一与力が中心になってすべての世話をするなどのごとが行われる。このような特殊な制度が今日も厳然として維持されていることに慣性の意義を認めることができる。

d 村落結合と地域的紐帯

村が結合して地域的に社会集団を形成する時、その圏域すなわち村と村との結びつきから生ずる枠組を考える必要がある。村落結合に紐帯の役割を果たしてきたのは、神社・水利・入会林野・墓地などである。中村吉治は、個々の契機が個別に研究されていながら、その重なった形がみのがされているとして個々の集団の累積状態に着眼する必要性を述べている¹⁶⁾。

神社によって結ばれた宮座の形成は、郷村制展開の中世後期にその起源がもとめられる。この場合、多くの村にまたがって水利や入会林野の共有ともからんで宮郷集団を形成した。畿内を中心としてこうした累積集団が多くみられるが、大越勝秋によって和泉国の事例がまとめられた¹⁷⁾。大和国平群郡住馬座伊古麻都比古神社の宮郷は、上郷10村、下郷6村からなり、北方座・上大座（乾座・良座・坤座・巽座）・下大座（峠を含む）・一分座・六ツ座（西座・中座・東座）を含むが、歴史地理的解明にはインテンシブな調査研究が待たれる。

井手（井堰）や溜池の用水を共有する水郷集団内における配水のメカニズムは、合理的で秩序が破綻する寸前に組織化された番水制などはその支えである。集団内でのオールマイティの権限をもつ村の存在には、それぞれ歴史的背景がある。早魃に苦しい過去をもつ讃岐平野や奈良盆地の水利に関して歴史地理的に研究したのが喜多村俊夫¹⁸⁾と堀内義隆¹⁹⁾である。集水域の山地を村々入会とした野山は肥料源・燃料源・建材源として近世農村にとって、必要不可欠なものであった。入会山の解体過程は形成の起源とともに歴史地理学のテーマである。山割がもっとも進んだのは、慶安（1648～52）から元禄（1688～1704）にかけてであるとされる²⁰⁾。山割には村別割（大分ケ）と個別割（小分ケ）があり、両者が同時に行われたこともあったが、入会山の原初形態である総有的形態が近代以降にもちこまれた事例もある。

墓地を同じくする村々は、墓郷と呼ばれ、畿内の平野部に多い。中には10数村に及ぶ大きな集団もあるが、枠組は近世を通じ、今日にいたるまで変化がない。郷墓の地域的枠組を墓郷集団とよぶことによって、いかなる歴史的背景によってそれが決定されたのであろうか、今後の研究を待ちたい。墓郷集団の圏域には祭祀・水利・入会林野のそれぞれの集団と齟齬するものがかなり多く、中世の郷、庄とは異なる秩序のもとにおける規制によって形成されたのではないかと考えられる点がある。

今後に向けて

村落地理学の歴史地理研究にとって今後、望まれることは諸地域にわたる地理学・歴史学・社会学・経済学・民俗学など各分野でのまだまだ少ない外国を含めての事例研究の発掘、収集である。それぞれを歴史地理的フィルターにかけて吟味し、これを一定の基準に合わせて整理する必要がある。できるならば村落の歴史的属性に関する調査の実施であろう。さらにコンピュータを駆使してこれを管理し、理論化を進展させるべきであろう。

注

- 1 小川琢治『人文地理学研究』1928
- 2 牧野信之助『土地および落史上の諸問題』1938
- 3 綿貫勇彦『聚落地理学』1933
- 4 中村吉治『村落構造の史的分析—岩手県煙山村—』1956
- 5 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』1940
- 6 桜田勝徳「村とはなにか」『日本民俗学大系3』1958
- 7 小野武夫『日本村落史概説』1936
- 8 水津一朗『社会地理学の基本問題』1964
- 9 清水三男『日本中世の村落』1942
- 10 木村 礎『近世の村』1982
- 11 水津一朗『社会地理学の基本問題』1964
- 12 山澄 元『近世村落の歴史地理』1982
- 13 近藤 忠「紀州における藩政村の村の集落構成の内わけ—主として日高川流域について—」
史林1-1 1958 その他
- 14 矢守一彦『幕藩社会の地域構造』1970
藤田佳久『奥三河山村の形成と林野』1992
- 15 三上勝也・山本剛郎『与力制度と村落構造—大和高原村落の社会学的研究—』1985
- 16 中村吉治『村落構造の史的分析—岩手県煙山村—』1956
- 17 大越勝秋『宮座—和泉地方における総合的研究—』1974
- 18 喜多村俊夫『日本灌漑水利慣行の史的研究（総論編・各論編）』1950、1973
- 19 堀内義隆『奈良盆地の灌漑水利と農村構造』1883
- 20 原田敏丸『近世入会制度解体過程の研究』1969

Summary

Settlement geography, especially village studies have played an important part in the history of Japan's geography. A recent trend in village studies of geography is the social research method. I want to mention several problems of the historico-geographical approach to village studies:

- a) Succession from village in the Middle Ages to village in the following periods
- b) Origin of the formal village and change
- c) Inside social structure of the village
- d) Combination of villages and territorial framework

